

第 15 回 韓 国 牛 病 学 会 の 報 告

浜名克己[†] (世界牛病学会名誉理事)



2010年9月7日に、第15回韓国牛病学会が韓国大田市の忠南大学で開催された。この学会には、韓国牛病学会の柳一善総務理事(畜産科学院家畜衛生監)の招請を受けて、日本から中尾敏彦山口大学教授(日本産業動物獣医学会会長、世界牛病学会理事)と私が参加

した(図1)。

韓国牛病学会は1995年に発足したが、当時のソウル大学 韓弘栗教授の要請を受けて、当時、世界牛病学会理事を務めていた浜名が、韓国の世界牛病学会加盟に助力したことがきっかけとなった。それ以来、日本産業動物獣医学会との交流が続いており、2005年10月には鹿児島市で開催された日本産業動物獣医学会(九州)で、第1回日韓合同シンポジウムが開催され、より緊密になった。

その後は、毎年、日本と韓国で交互にシンポジウムまたは特別講演等が開催され、2008年の第4回シンポジウム(韓国)の概要は本誌第61巻第11号842頁に紹介されている。また直近では、2010年1月の日本獣医師会獣医学術学会年次大会(宮崎市)での日本産業動物獣医学会による乳牛繁殖国際シンポジウムに、韓国から数

名の獣医師が参加し、交流を深めた。

本学会には韓国各地から臨床獣医師140名が参加し、特に若い人が多く、皆熱心であった(図2)。また忠南大学の学生も白衣で聴講していた。学会の役員は大学の若手教員が多く、自発的に積極的な役割を果たしていたのが印象的であった。

今回のテーマは「最新の牛臨床へのアプローチ」で、総合司会は李仁炯助教授(ソウル大学)が務めた。プログラムは次の通りであった。

①「2010年に韓国で発生した口蹄疫の特徴と対策」

Dr. In-Soo Cho

(国立獣医科学検疫院, 海外伝染病課長)

②「日本および諸外国における乳牛の繁殖管理の進展と諸問題」

中尾敏彦博士

(日本産業動物獣医学会会長, 世界牛病学会理事)

③「牛臨床への針灸術の応用」

金徳煥教授(忠南大学)

④「牛胚移植の実地活用と受胎率の向上」

Dr. Won-Yoo Lee (ソウル乳牛協同組合研究所)

⑤「牛呼吸器疾患の診断と対策」

Dr. Gook-Hyun Seo (全南大学教授)



図1 忠南大学動物病院4階の学会会場内で、左から韓国牛病学会の李柄千会長(ソウル近郊開業)、韓弘栗ソウル大学名誉教授、著者、中尾敏彦博士。



図2 熱心な青年獣医師で埋め尽くされた学会場

[†] 連絡責任者：浜名克己

〒579-8012 東大阪市上石切町2-34-21

☎・FAX 072-981-3638 E-mail: hamanak@hct.zaq.ne.jp



図3 英語で講演中の中尾敏彦博士と、北大で学位を取得し日本語と英語に堪能で、完全な通訳を果たしたDr. Jongim Park建国大学助教授。

⑥ 「牛蹄病の治療と管理」

Dr. Gi-Wooung Kang (個人開業獣医師)

⑦ 「反芻動物の栄養生理と代謝病の予防対策」

Dr. Chang-Won Choi (大邱大学教授)

どの演題も牛の臨床現場で大きな問題となっているテーマばかりで、これはそっくり日本にも共通している。いずれも非常に興味深かったが、中尾博士の英語による講演（図3、女性のDr. Jongim Park建国大学助教授による見事な通訳付き）以外は、当然、韓国語が用いられたので、詳細は理解できなかった。しかし、カラフルな映像により、その概要はかなり理解できた。

口蹄疫の講演内容は、2010年2月から韓国北部4州で次々と牛、豚に発生し、その総数は2,030頭に達し、合計55,830頭が殺処分された。また近年発生している台湾、中国、インドシナ諸国、それに日本の状況が詳細に報告された。

中尾博士の講演の内容は多岐にわたったが、特に今後は群全体としての繁殖性向上が重要であり、そのためには移行期における栄養管理が大切であること、その現実的なモニター法、さらに乾乳期の短縮や消去が寄与することを、具体的な数値で示された。この内容は高く評価され、参加者の大きな反響を呼び、質問が相次ぎ、終了後も、学会関係者から全国的に紹介したい旨、希望が寄せられた。

最後の栄養生理の講演の一部に、韓国で人気が高く高価な（輸入肉の数倍の値段がする）韓牛の今後の改良方向の一つとして、日本の和牛のような霜降り肉をめざすことが示された。和牛の飼育状況や肉のランク付けなどが詳しく報告されたのには驚いた。

学会の講演内容のレベルは高く、いずれも洗練されていた。また日本のように時間厳守ではなく、各演題とも質問者が尽きるまで許容されたので、終了予定の午後5時半が実に7時過ぎとなったが、なお多くの聴講者がいた。

日本と韓国の間には、近年の大問題となったBSE、高病原性トリインフルエンザ、口蹄疫を始め、アカバネ病などの感染症、また繁殖障害、乳房炎、代謝病、蹄病など、まったくと言ってよいほど、同じ問題が発生している。人と物が大量に国際間を自由に往来する今日、産業動物獣医界においても、両国のより一層の緊密な連携が欠かせない。

日本獣医師会獣医学術学会年次大会（岐阜）にも韓国からの臨床獣医師の参加希望者が多いとき（注：2010年末からの韓国各地の口蹄疫の多発のため実現せず）。両国の交流は研究者のみでなく、今後は、実際に臨床現場に働いている獣医師間のさまざまな交流が望まれる。